

同志社大学生に期待するもの

奨励	八田 英二〔はった・えいじ〕
奨励者紹介	同志社大学長 同志社大学経済学部教授
研究テーマ	産業組織分析

すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」

(ルカによる福音書 一〇章二五―二八節)

同志社大学のはじまり

おはようございます。私が学長になって初めて今出川のチャペル・アワーでお話することになりました。従来ですと、京田辺での第一回目のチャペル・アワーが私の順番でございまして、今日は今出川のクラーク館のチャペルでお話ができるということで、非常にワクワクしております。今年で学長になりまして十三年目ということですので、チャペル・アワーでお話しするものも十三回目となります。ここ同志社大学クラーク館は、二年前に新たに改装されました。私の学生時代は、この場所は教室でございました。もともとはチャペルでしたので、このような元通りの姿を復元したということになっております。由緒あるチャペルでお話できることを非常に光栄に感じております。

今日は若い方も多いと思います。同志社大学には多くの留学の機会があることはご存じだと思います。協定を結んでいる大学に、学生を送り出す枠が二〇〇人以上あります。しかし現実には海外に行っているのは一〇〇人足らずで、あと一〇〇人分くらいの枠が空いております。なぜでしょうか。多分、就職のことが大きいのではないのでしょうか。三年生の秋から就職活動が始まりますから、三年生で留学するのは難しい。就職活動が三年の秋から始まって、内定をもらうのが四年生の五月くらいでしょうか。そういうことでなかなか留学に踏みきれない。もう一つは語学の問題があるかもしれません。協定校で英語での授業が行われる大学に派遣しようと思うと、TOEFLで五五〇点は必要です。五五〇点をとるのは大変ですが、その二つが、海外へ行く機会が豊富にあるにもかかわらず、踏みきれない、大きな理由だと思います。また、一つの特徴として、女子学生が七割くらいを占めているということが挙げられます。男子学生は度胸がないのでしょうか、海外に行くという希望が少ないということがあります。

今は、これだけ留学の機会が豊富にあります。今から一四六年前、新島襄が行ったときはどうだったでしょうか。新島襄は、ご存じのように一八四三年二月に生まれました。一八六四年、旧暦六月、新暦七月に函館から脱国いたしました。二十一歳のときです。大学三年生に該当する年齢で、彼はアメリカへ旅立ったということになります。実質的に留学でありましたが、ただ、今の学生のように恵まれた海外への出発ではありませんでした。一八六四年、函館からベルリン号という船に乗り込み、セイヴオリーという船長が彼を運んでくれたわけです。当時、日本人の脱国を手助けすることは、船長にとって大きな冒険でありました。セイヴオリー船長は新島襄を脱国させたということで、後に会社を解雇されてしまったと記録に残っております。新島襄は、今、万国博覧会が開かれております上海にまいりまして、上海で船を乗り換えました。乗り換えた船の名前は、同志社でもよく使われておりますワイルド・ローバー号です。テイラー船長、彼がボストンまで新島を運んでくれました。新島はボストンで生活をし、フィリップス・アカデミーという学校（日本では高校に相当するでしょうか）で、英語とアメリカの生活を体験して、その後、アーモスト大学に入學いたしました。アーモスト大学には、このクラーク・チャペルの三倍くらいの広さのジョンソン・チャペルというチャペルがあります。右の壁に新島襄の肖像画がかかっております。今から八年ほど前に、一度、新島襄の肖像画が里帰りして同志社のハリス理化学館のなかに展示したことがございました。左側にはアーモスト大学の卒業生のうち、大統領になったクーリッジの肖像画が掲げられておりました。右が新島襄、左がクーリッジ、歴代のアーモストの総長の肖像画がチャペル一面にかけられているという大学がアーモスト大学でございます。日本人が、海外でバチエラー・オブ・サイエンス（理学士）という学位をもらったのは、このアーモスト大学においての新島襄が最初でございます。そしてアーモスト大学を卒業した後、アンドーヴァー神学校にまいりまして、そこで宣教師補という資格を得ました。同志社は新島襄がつくった大学、学校でございますが、新島襄は教育者であると同時に宣教師でもおりました。

新島襄は一八七四年、日本に帰ってくる前、アーモスト大学から車で四時間ほど北に位置するバーモント州ラットランドにあるグレース教会という、かなり古い大きな教会の壇上で演説をしております。彼は海外に派遣する宣教師の送別会で、演説を頼まれていました。彼は演説の原稿を用意しておりましたが、それを取り止めて、その場で「私は日本にキリスト教主義の大学をつくりたい」というスピーチを行いました。そして聴衆に向かって、「寄付をしていただきたい」と訴えたのです。都合五〇〇〇ドルほどのお金が集まったと記録されています。そのなかで新島襄が最も心を打たれた寄付は、貧しい農夫が、演説が終わった後、帰りの汽車賃を差し出して「これを日本にキリスト教主義大学をつくる足しにしてください」と言って渡した二ドルの寄付でした。新島襄は後に、そのことを、最も記憶に残っている、そしてうれしい思いをした寄付だったと語っております。

そのような熱い思いで、新島襄は日本に帰国し、一三五年前の明治八年（一八七五年）、京都の地に同志社をつくったわけでありす。最初は生徒八名で、教師は二名という、非常に小さな学校としてスタートしました。一年後には熊本バンドの学生達が同志社に入学して来るわけです。当時、熊本市に熊本洋学校という学校がありまして、ジェーンズというアメリカ人が教えていたわけですが、その学生が何名か、キリスト教の信者になって熊本市民から迫害を受けるという事件がありました。そこでジェーンズは、その生徒たちに、同志社英学校へ転校するように勧めて、そして明治九年、十数名の若い熊本洋学校の学生が同志社に移ってまいりました。その学生を同志社では「熊本バンド」と呼んでおります。非常に優れた学生たちでありまして、そのなかから、その後同志社の総長、教育者、牧師となった学生たちが輩出されております。このようにして同志社は明治八年にできあがり、そして熊本バンドを迎え入れ、英学校として発展をしていきました。ただ、新島襄が最も残念だったのは、同志社で中等教育を受けたすべての卒業生（その頃はまだ大学はございませんでしたので他の大学に移っていくことになりましたが）に、自ら高等教育を授けることができないということでした。彼には、キリスト教主義の大学をつくりたいという思いがありました。そのために何とか大学をつくりたいと、日夜、日本全国を駆け回り、寄付を募り、そして仲間を集めるということをしていました。

一八九〇年、新島襄は四十七歳で天に召されましたけれども、大学をつくることはできませんでした。ようやく同志社大学という名前ができたのは、一九一二年、死後二十二年が必要だったことになります。旧制の帝国大学と同じ特権をもった旧制の大学令による大学になったのが、一九二〇年。専門学校令による大学から本当の意味での大学になったのは、一九一二年からさらに八年後だったということになります。一九二〇年を同志社大学が発足した年と考えると、丁度今年は九十年ということになります。

同志社大学での学び

大学の社会的使命は何か。若い同志社の学生は何を期待して大学にこれたか。多分、よく言われるのは、「新しい知識を得るために大学に来た」ということではないでしょうか。学術・技芸の知識を学生に授けるのは大学の社会的使命です。これは確かです。同志社大学でも、現在は十二の学部、十二の学問の分野で学生に新しい知識を教えております。来年からもう一つ学部ができますので十三学部となります。それぞれの分野において、最新の知識を研究、教授する。そして学生はそれらの知識を身につけて卒業していくことになります。ただこれだけでは京都大学でも立命館大学でも京都産業大学でも、どの大学でも行っていることであって、同志社大学という特徴が出るわけではございません。大学のもつ二番目の、より重要な社会的使命があります。それは何か。人格形成に寄与するということだと考えております。人間性の涵養、これも学術・技芸の知識と同等に、それ以上に重要な大学の使命だと思います。しかも新島襄が考えたのはキリスト教主義に基づく大学をつくりたいということ。キリスト教主義に基づく人格形成に重きをおいた大学をつくりたいというのが、彼の夢だったと思います。しかし人格形成は単に教室の授業に出て、先生のお話を聴くだけでできるとは、到底考えられません。同志社大学におられる四年間、睡眠時間以外はすべて人格形成の場だと考えております。もちろん、大学でどのような人と出会ったのか、どのような先輩・後輩・友だちと付き合ったのか、どのような本を読んだのか、どのようなサークル・クラブに参加したのか、これも人格形成に寄与する大きな要素だと思います。同志社大学は、キリスト教精神に基づいて皆さんの人格形成のお手伝いをしたいと考えている大学です。これが建学の精神である良心教育であります。別にキリスト教の信者になっていただきたいとは考えておりません。新島襄は宣教師でしたから、日本全国各地に教会をつくりました。その影響で、学生のなかからキリスト教信者が生まれたことも確かです。ただ彼はキリスト教信者をつくりたい、キリスト教を広めたいという気持ちで学校をつくったわけではございません。ミッションスクールという学校がございます。これはキリスト教を広めるためにつくられた学校です。同志社はキリスト教精神に基づく人格形成、これを行いたいと考えていますが、必ずしもキリスト教自体を広めることを目的としておりません。そういう面で同志社はミッションスクールではございません。

多分、一般の学生の方々、卒業生の方々も経験されたことと思います。まず入学式、卒業式、ともに祈りで始まり、祈りで終わる。讃美歌が歌われ、聖書が読まれる。これを経験されたことだと思います。そして、このキリスト教文化センターが主催しているチャペル・アワー、これもキリスト教の礼拝形式で行われております。しかし、それ以外では、なかなか同志社の学生がキリスト教に触れることはないかもしれません。ただ先生方、職員の方々は、すべてキリスト教主義の精神に基づく学生の人格形成に寄与したいと考えていることは確かでございます。新島襄の人生には、いろいろな出来事がございます。新島襄のすべての生活、学生への接し方はキリスト教の精神に基づいていると痛感しております。できるだけキリスト教主義の精神を、同志社のいろいろな場で学生に実感していただきたいと思います。必ずしも、私はキリスト教の信者になれといっているわけではございません。同志社が他の大学と比べて特徴的なところは何か。キリスト教主義の精神に基づいて皆さん方の人格形成に寄与したいというところがございます。それぞれ学部が違えども、同志社大学生である限り、キリスト教主義の精神に基づいた人格形成をしていただく、ここにおいて同志社のアイデンティティがあるのではないかと思います。

同志社大学のアイデンティティ

今から三年後、二〇一三年からは、京田辺と今出川の二つのキャンパスで学部が縦割り離れてしまうことになります。神学部・社会学部・政策学部はすでに今出川校地に一、二年生がきておりますが、現在、大多数の文系の一、二年生は、京田辺校地で勉強しております。理科系の理工学部・生命医科学部・スポーツ健康科学部・心理学部・文化情報学部の学生

と触れあうことができます。二〇一三年からは、それもなかなか難しくなるかもしれません。そこにおいてこそ、同志社大学生、同志社卒業生のアイデンティティが一層重要になるのではないかと思います。それは何かというと、キリスト教主義の精神に基づいて、人格形成の場を、同志社大学は提供した。学生はそれを受けられた、身につけられたということです。これは同志社の学生としてのアイデンティティではないかと考えております。大学としては、いろいろな場で、キリスト教に基づいて、学生に何を求めようとしているのか、どのような人物を育てようとしているのかをお教えしたい、知っていただきたいと考えております。たとえば新島襄がどのような生涯を歩んだか、それを学んでいただく一端として、毎年八月、お盆には学生支援センターが函館キャンプを行っております。四十名くらいの学生が夜行列車に乗り、函館に行く。四泊五日、現地解散ですが、函館の新島襄の脱国の碑の前で、お話をするという機会を設けております。あるいはキリスト教文化センターでは、熊本キャンプを実施しています。熊本バンドという熊本洋学校の学生たちが、熊本駅の裏にある花岡山の上に集まって、キリスト教のもとに結束を強めたという「奉教の碑」を見学に行くということもやっております。あるいは、アーモスト大学に留学することもできます。また、同志社小学校は修学旅行でアーモスト大学に行くことになっております。八泊十日でアメリカのアーモスト大学に行つて、向こうの寮で生活して、あとの四泊はボストンに行くという研修を計画しております。明治にできた大学、学校はいろいろあります。ただ創立者の名前と功績が語り継がれ、創立者に関して教職員とともども、卒業生も尊敬しているという教育者は、わずかしかありません。慶応の福沢諭吉、早稲田の大隈重信、そして同志社の新島襄くらいではないかと考えております。

同志社と新島襄は切っても切り離すことができない存在です。そのルーツは、どこにあるのか。同志社は、新島襄の、日本でキリスト教主義精神に基づいた、しかもリベラルアーツの大学をつくりたい、そのような思いからできた大学です。だからこそ、新島襄・キリスト教主義精神・同志社大学・学校法人同志社を切り離すことはできないと考えております。同志社におられる間に、キリスト教主義の精神とはどういうものか、理解していただきたいと考えております。それは、形になって見えるものではありません。しかしキリスト教主義の精神を身につけていただきたいという大学の思いから、それに基づく仕掛け・行事は数多くあります。ぜひともこの四年間、授業に出ることも大事でしょうし、就職活動も大事かもしれません。しかし、ただ同志社の神髄に触れていただきたいと私は考えております。

同志社大学生として

このチャペル・アワーは、学生紛争の前までは、水曜日二時間目にすべての授業がなく、チャペル・アワーの時間として設けられておりました。今は授業中ですので、なかなかチャペル・アワーに出ることが難しいということが、学生の側の事情としてあるかも知れません。しかし、キリスト教主義精神に基づく同志社である限り、函館キャンプや熊本でキリスト教文化センターが提供しているサービスなど、いろいろな場を利用していただきたいと思います。今年八月からは同志社中学校が岩倉に移転することになっております。中学校の敷地にあるチャペル、あのチャペルも同志社の象徴的な建物ですから、同志社のキリスト教主義を何らかの方法で学生に伝えていければ良いのではないかと考えております。また、こちらのクラーク・チャペルは規模としても、大きさとしても手ごろであります。卒業生の皆さんが、結婚式の会場としてこのチャペルを使っただけでも構いません。今は土日で年間六十から七十組の予約を受け付けていると聞いています。雰囲気の良いチャペルです。同志社大学にとりまして卒業生も大きな宝だと思います。大学四年間でキリスト教主義精神に基づき、新島襄という言葉をあちこちで聴かれて卒業していける方々へのサービスも大事だと考えています。このチャペル、卒業生の方にも利用していただいたら良いと思います。在学生、現役の同志社大学の学生の皆さんに、大学が考えているサービスは、知識を提供するだけではない、人格形成、生き抜いてくえでのこれらの皆さんの人生の一つの指針となるような知恵もつけていただきたいと考えております。同志社は知を伝達するところ、その「知」という言葉には知識だけではなく、知恵の意味も含まれていると理解しております。皆さんには、在学中に、知識とともに知恵も身につけていただきたい。その知恵をもって、これからの長い人生を歩んでいただきたいと考えております。

今日、讃美歌を歌い、聖書を読みました。聖書を繙いていただくと、含蓄の深い書物だとわかります。新約聖書の最初の第一章にはイエス・キリストの系譜が出ております。一五〇人ほど、イエスに至るまで、最初からずっと出ておまして、何が書いてあるんだろうと、その系譜を読んでいただくと気がつくことがあります。たった四人だけ女性の名前が出ております。なぜ四人の女性の名前が出ているのか。これをつつ調べていただくと、いろいろなことがわかんと思います。いろいろなところで聖書を繙いていただければいいのではないかと思います。

今出川校地のチャペル・アワーでお話ができること、私にとって、これほどうれしいことはありません。在学生の皆さん、同志社は何を学生に期待しているのか、それを、身をもって体験して卒業していただきたいと考えております。ありがとうございました。

二〇一〇年六月二日 同志社スピリット・ウィーク
水曜チャペル・アワー「奨励」記録